

原子爆弾災死者収骨所

非核非戦

— 共に生きよ —

〈周辺地図〉



ご案内

長崎教務所では、非核非戦(原爆)定例法要を下記のとおり厳修しています。どなたもぜひお参りください。

非核非戦(原爆)法要

8月9日 午後1時30分～

非核非戦(原爆)定例法要

毎月9日 午後1時30分～

真宗大谷派(東本願寺)長崎教務所

〒850-0052 長崎市筑後町9-23

TEL: 095-825-8831 FAX: 095-825-8836

E-mail nagasaki@higashihonganji.or.jp

U R L http://www.hikakuhisen.com

■業務時間 9:00～17:00時 ※平日のみ

真 | 宗 | 大 | 谷 | 派

長崎教区

SHINSHU OTANI HA NAGASAKI KYO-KU



一九四五年八月九日、長崎。たった一発の原子爆弾によって、数万のいのちが一瞬にして奪われました。その亡骸は、顧みられることもなく、野に遺棄されたままとなり、また、茶毘に付されても、そのままになっていました。この惨状を憂えた人々が集めてくださった、一万余とも二万余ともいわれる遺骨を収めているのが、この——非核非戦の碑——「原子爆弾災死者収骨所」なのです。

原爆投下二日前の長崎・浦上の地

〔1945年8月7日・米軍撮影 資料提供：長崎原爆資料館〕

# 「非核非戦」の碑について

ここに一万体とも二万體とも推定されたお骨が収納されています。このおびただしい数のお骨は、昭和二十年（1945年）八月九日、米軍が投下した原子爆弾の直撃を受けて亡くなった身元の分からない方々の遺骨です。

被爆した長崎の爆心地周辺は焼きつくされ、爆風に吹き飛ばされた瓦礫に混じって、悪臭鼻をつく屍が、道路の脇や川底などに夏日に晒されて累々と横たわっていました。

家族を捜し回っている人々の町に進駐してきた米軍は、爆心地そばの浦上川沿いに飛行場を造る計画を立てます。

こうした惨状を憂えた人たちが、とにかく爆心地付近の死人を何とかしようとして、

拾い始めました。やがて、西坂にあった教務所（当時は「東本願寺長崎説教所」と呼んでいた）の婦人会は、昭和二十一年（1946年）三月六日、教務所長の呼びかけに集まり、市郊外の門徒同志にも応援をたのんで人数が増えていきます。

作業は長崎駅あたりから始まって大橋・住吉方面へ向かいます。水を求めて川の中に打ち重なったままの死体、あるいは半分は腐って半分は白骨になった者など途方もない数です。廃材を集めてはできる限りは茶毘に付す。食べ物に窮して痩せた体で荷車を牽き、そして急ぎよ仮設した教務所に集めるといふ毎日の作業でした。そのうち復員してきた僧侶も加わります。現在平和記念像が建っている丘にあった長崎刑務所では、窓に向かって寄りかかったまま息絶えた白骨の群を見ました。そして作業が終わるころには秋風が吹いていたそうです。

市の収容施設に引き取ってもらうことを計りましたが、そこも膨大な遺骨の山に手つかずの状態でした。その後も噂を聞いた人々によって持ち込まれた遺骨も加わってさらに量は増えます。置き場に困って収容先を捜し回りましたが雨露をしのげるようなところはなく、困り果てた末に一時は大浦の妙行寺の本堂に預かってもらいました。ところがそこも被害を受けていたため雨漏りがひどく床が抜けたりでどうにもなりません。結局教務所に仮安置の場所を設け、二十六個の木箱に納めて責任をもってお預かりすることになったわけです。

一体この、出身地も名前も不明な人々はどういう人々なのか、今も知ることができません。

私たち真宗大谷派長崎教区は、この物言わぬ人々の前でなすすべもなく、とにかく毎月九日には法要を勤め営んできました。そして十年ごとには県内外有縁の人々が集まったの法要も勤めてきました。また、五十年間の歩みの中で、一体これらをどのように処遇すべきかと、色んな議論も重ねて来たのですが、なかなか結論が見つからないまま、長い歳月を経てしまいました。

しかし、この半世紀の時代を費やして、私たちが識ることになった一大事があります。

それは、ついに原子爆弾という核兵器までも作り出してしまった人間の知恵の愚かさです。そして、その知恵の無明の間が生み出す罪の深さです。

死者たちはこの人間の愚かさを、哀れみ、悲しんでくださっています。その悲しみの声は実際の耳には聞こえません。しかし心の耳を澄ます時、戦争にたおれた方々が「非核非戦」と叫んでおられます。

今日、碑の建設に意を決した私たちは、『非核非戦』を碑文の銘としました。そしてさらにその声は、「我だけ」が地上の主人公になるのではなく、あらゆる命と共に生きよ」と願ってくださっています。

ここに永い歳月をかけて私どもが聞き取った死者から出ずる慈悲の声を石に刻んで、真の平和を希求する人間の世に公開いたします。

真宗大谷派 長崎教区

※この縁起文は、資料が乏しいため、当時を知る方々の聞き取り調査を基に作成したものです。



1999年に現在の場所に移築されるまで、東本願寺長崎教務所（長崎教会）の裏手に、収骨所があった



木箱に収められた遺骨は、仮復旧した東本願寺長崎教務所（長崎教会）に安置された 写真提供：慶福寺



進駐軍は、火葬された遺骨が散乱する爆心地付近に簡易飛行場（アトミックフィールド）を急造した（白円内） 写真提供：長崎原爆資料館／撮影：H.J. ピーターソン氏



被爆直後の東本願寺長崎教務所（長崎教会） 当時は、現在の「西坂公園」にあった 写真提供：長崎原爆資料館／撮影：小川虎彦氏

# 非核非戦と共に——長崎教区の歩み——

1945(昭和二〇)年

8月9日 11時2分、長崎に原爆投下。【写真①】市内寺院・教会崩壊する。門徒同朋によって遺骨が収集される。

(現在二万有余体の遺骨が長崎教会に安置されており、毎月九日に非核非戦法要が厳修されている)



① 「写真提供：長崎原爆資料館／撮影：松田弘道氏」

1946(昭和二一年)

原子爆弾殉難者追弔法要厳修。

1948(昭和二三)年

東本願寺、西坂町(現在の西坂公園)より、築後町移転につき、長崎県と物件移転工事契約を結ぶ。(当時、西坂には、原爆無縁遺骨堂・本堂他が現存していた)

1951(昭和二六年)

同朋生活運動が暁烏内局によって提唱され、本廟奉仕団の上山始まる。

1953(昭和二八年)

長崎市より原爆遺骨を返還してほしいとの願いがあり、教区総会を開き議論し、原爆遺骨の返還を否決。それにより、納骨堂建設の機運が高まり、教務所会館建設委員二五名が決定。

1954(昭和二九年)

長崎教会(教務所)会館並びに原爆犠牲者無縁遺骨安置所建設について上申。

1955(昭和三〇)年

原爆十周年 全国仏青BS・GS大会が新門を迎え開催。

会館建設(本堂)着手。原爆犠牲者無縁遺骨特別安置所も新設。4月完成。

赤べえ(上演)

8月9日 原爆法要。(於長崎教会 講師/深草淳)

8月10日 同朋大会。(於長崎市民会館 講師/高史明)

仏青座談会。(於長崎教会)

8月11日 仏教青年大会。爆心地から長崎市民会館まで、約350人の参加者と、平和行進を行った。市民会館にて、記念講演ならびにシンポジウムを開催。

(講師/高史明 シンポジウム/栗原貞子、高史明、長野崇、深草昭壽)

1992(平成四年)

8月23日 「原爆五十周年に向かって 非核非戦の集い」実施。(於長崎市民会館 講師/高史明、児玉暁洋)

全戦没者追弔法会「追弔の辞『戦争にいのち奪われたあなた方よ』」大谷派合唱連盟により演奏。

1993(平成五年)

教区教化テーマ「非核非戦—共に生きよ—」とし平成7年度「原爆五十周年」に向けて3ヶ年、非核非戦研修実行委員会を中心に各連盟体において研修会を実施。

8月7日 仏青「平和の集い」。(於爆心地公園)

9月16日～17日 非核非戦—泊合宿。(於オリオンホテル)

1994(平成六年)

8月6日 仏青により「戦没者・戦争犠牲者・原爆五十回忌法要」が厳修される。

10月18日～20日 非核非戦研修の一環として、「沖縄研修会」を実施する。

1995(平成七年)

原爆五十周年 非核非戦法要実施。

7月9日 原爆五十周年記念非核非戦法要厳修。約2千人が参詣する。(於長崎市公会堂 導師/大谷演慧 門首代行 講師/武宮聰雄)

1996(平成八年)

1960(昭和三五年)

原爆十五周年記念法要が新門を迎え厳修。  
仏青連盟十周年記念大会開催。

1961(昭和三六年)

親鸞聖人七百年御遠忌法要厳修。

1963(昭和三八年)

当時の教務所は原爆被災後の残材をもって建てられており、老朽化してその機能を發揮できないので、昭和40年の御遠忌厳修を控え、修復工事に取り掛かる。

1964(昭和三九年)

8月20日 旧教務所解体式。

1965(昭和四〇年)

新教務所完成。

1月31日 新教務所落慶法要並びに祝賀会。  
教務所完成の後、納骨堂の建設に着手する。

原子爆弾災死者収骨所完成。

1969(昭和四四年)

8月28日 原爆二十五回忌法要。(於国際文化会館  
講師／東昇)  
寺族仏青発足。

1975(昭和五〇年)

原爆三十年。

1977(昭和五二年)

終戦三十三回忌法要。(於長崎教務所)

1985(昭和六〇年)

原爆四十周年 非核非戦  
同朋の集い実施。【写真②】  
統一テーマを「真の平和を求めて」とする。

7月29日 こども大会。(於  
長崎市民会館 講師／福田  
玄洞 劇団すわらじ)おにの



②

8月4日 仏青「真の平和を求めて」行進。【写真③】



③

1997(平成九年)

5月6日 原子爆弾災死者収骨所問題検討委員会が設置され、今後遺骨をどのようにするかが話し合われる。

1998(平成一〇年)

7月23日 教区会、7月24日 教区門徒会において、  
原子爆弾災死者収骨所問題検討会を原子爆弾災死者  
収骨所検討委員会に移行することを議決し、同委員会  
にて、新収骨所の建立を決定。  
仏青による収骨所の歴史調査実施。

1999(平成一一年)

9月6日 起工式  
9月8日 着工  
10月8日 仏青、旧収骨所より遺骨を教会本堂に移す。一部新収骨箱へ移す。

10月9日～18日 有縁の方によって、遺骨を旧収骨箱より新収骨箱に移す。

10月30日 新収骨所完成。

11月1日 遺骨を新収骨所に移転する。

11月9日 原子爆弾災死者  
収骨所落慶法要厳修。【写真④】(於長崎教会 導師  
／大谷暢顯門首)



④

2005(平成一七年)

原爆六十周年記念大会(於国際文化会館)

# ただひとつなる罪

## 「非」とは

私の考え方、生き方、  
社会の在り方を問い直す  
仏の悲のはたらきなり

## 「核」とは

人間の「チエ」なり  
人間の無明なり

## 「戦」とは

人間の心の奥深くにある  
差別の心なり

## 「非核非戦」の碑



戦後まもなく、長崎教区は遺骨をお預かりし、現在地に移転した。以来 50 年にわたり、収骨所を設け遺骨を管理してきたが、原爆 50 周年を機にこの地に移設されることになり、その際「非核非戦」の碑銘をかかげて、平成 11 年 (1999 年) 11 月 9 日に落成した。中には、1 万體とも 2 万體とも言われるお骨が収められている。この碑が、単に「原子爆弾災死者収骨」の碑ではなく、「非核非戦」の碑であるのは、原爆を過去の悲劇としてのみとらえるのではなく、現在を生きる私たち一人ひとりの課題として、また、真の平和を希求するものとして、世に公開するためである。

戦没者たちは決して  
敵の砲弾や原爆で  
死んだのではありません  
戦争を「聖戦」と呼び  
美化していこうとする

## 人間の無明

そのただひとつなる罪に  
よってではないでしょうか  
「反核反戦」と「非核非戦」  
他者にはたらきかける「反」とともに  
自分のうちに 問いかける  
「非」という語<sup>ことば</sup>をもって  
はじめて自分というものが  
あきらかになってくるのです

## 「核」も「戦」も

<sup>ひとごと</sup>  
他人事ではありません

自分自身のところの中にこそ  
「核」や「戦」は存在するのです